

タタール商人の町カルガルの成立

——18世紀前半ロシアの宗教政策と東方進出——

濱 本 真 実

は じ め に

- 1 タタール人上層階級の消滅と正教化政策
 1. 1 ピョートル1世時代のタタール人上層階級
 1. 2 18世紀前半の正教化政策
- 2 東方政策におけるタタール人
 2. 1 沿ヴォルガ地方のタタール人による東方への移住
 2. 2 オレンブルクにおける対中央アジア貿易の開始
- 3 カルガルのタタール商人
 3. 1 カルガルの成立
 3. 2 イスラームの学問の中心としてのカルガル

お わ り に

は じ め に

「タタール」は、古くから商人と同義で使われる言葉でもあり⁽¹⁾、中央アジアにおいては現在でも彼らはユダヤ人と並んで、商人としてのイメージが強い。タタール商人は18世紀後半以降、ロシアと中央アジアを結ぶ貿易で成功し、蓄えた富をモスクや教育機関に寄進して、19世紀後半から20世紀の中央ユーラシアに大きな影響を与えるジャディード運動誕生の下地をつくった。彼らが中央ユーラシア近代史上、重要な役割を果たしたことは疑いない。これらのタタール商人のなかでも、1745年に、ロシアの「東方への窓」とも呼ばれたオレンブルク近郊のカルガル Каргалы, Qarghālī (別称セイトフスカヤ・スロボダー Сеи-

(1) Z. V. Togan によれば、これは、モンゴル時代に「タタール」オルトク商人が貿易を担っていたことによる [Paksoy 1992: 86]。

товская слобода,あるいはカルガラ Каргала)に、カザンから移住したタタール商人の団は、オレンブルクを基点とするロシアの対中央アジア貿易において先駆者として活躍した⁽²⁾。

カルガルのタタール商人は、ロシア政府からカルガルへの移住の条件としてさまざまな特権を与えられていた。そのうちの一つとして、信仰の自由の保証があり、カルガルの町の外側には、彼らの移住後すぐに大きなモスクが建てられた[豊川 2006: 276]。1740年代は、ロシア帝国において最も激しい正教宣教政策が採られた期間であったにもかかわらず、このようなモスクの建設が実現されたことは注目に値する。

18世紀前半のロシアは、東方との交易を求めて、また、草原の遊牧民を支配するため、着々と東南に領土を広げていった。同時に、帝国内の東方諸民族に対しては、これまでになく大規模な正教化・ロシア化政策が推し進められた。タタール商人は、まさにロシアの東方進出とキリスト教化政策の狭間で頭角を現していったと言える。先行研究においては、エカテリーナ2世時代に、ムスリム臣民に対して寛容政策が採られて以降のタタール商人についてはある程度研究が進んでいるが、18世紀前半のタタール商人の台頭について、ロシア帝国の東方政策と宗教政策の関係を背景にした議論は、いまだ十分になされていないように思われる⁽³⁾。本稿は、カルガルのタタール商人誕生の背景をたどるとともに、18世紀前半ロシアの東方政策と宗教政策の特徴を考察することを目的とする。

史料としては、ロシア帝国法令大全(ПСЗ), 様々な文書を集成したソ連バシキール共和国とタタール共和国の資料集(МИБА, История Татарии)等のロシア語による文書集を主に利用した。カルガルに関係するウラマーについては、シハーブッディーン・メルジャーニー Shihāb al-Dīn Marjānī による『カザンとブルガルに関する情報の集成』 *Mustafād al-Akhbār fī Ahwāl-i Qazān wa*

(2) タタール商人については、『中央ユーラシアを知る事典』: 323-324を参照。

(3) この問題に触れた研究としては Frank 1998: 21-39 がある。

Bulghār を利用した⁽⁴⁾。

18世紀ロシアの東南地域については、豊川 2006 がバシキール人の動向を中心に、詳細な議論を展開している。本稿は、豊川 2006 と関心の重なる部分も多いが、本稿においては、豊川 2006 では比較の対象として簡単に触れられるにとどまるタタール人を軸にして議論を進めていく。このことにより、ロシア帝国下の同じムスリムであるバシキール人とタタール人の違いが明確になるとともに、ロシア帝国の支配に対して蜂起を繰り返したバシキール人とは異なり、ロシア政府と互恵的な関係を結ぶことも多かったタタール人の特徴が明らかになるはずである。

1 タタール人上層階級の消滅と正教化政策

1. 1 ピョートル1世時代のタタール人上層階級

すでに17世紀後半のロシアにおいて、非正教徒上層階級に対する正教化の圧力は急速に強まっていたが〔濱本 2005〕、彼らに対する抑圧は、18世紀最初の四半世紀にさらに激しくなった。

ピョートル1世は、正教に改宗しないタタール人上層階級を、実質的に農民階級に引きおろした。ピョートル1世はまず、1713年11月3日、カザン県とアゾフ県のムスリムに対して、半年以内にロシア正教に改宗しない場合、正教徒農民の居住する彼らの所有地を没収するという命令を出した〔ПСЗ Т.5: 66-67(№2734)〕。さらに同月27日には、ムスリムの所有する村は、短期間のうちに所有者全員が改宗せねば村を没収する、という新たな命令が出されている〔ПСЗ Т.5: 71(№2741)〕。1715年7月12日の法令では、改宗を拒むムスリムのもとにいるロシア人農民を、その耕作と用益地と共に没収する、とされたが、それ以外の土地は、ムスリムの土地所有者の手に残すことが明記され、改宗を拒

(4) この史料については小松 1983: 482-483 を参照。この史料およびその現代タタール語訳 *Мәржани* 1989 その他の文献を小松久男氏より拝借した。ここに記して謝意を表したい。なお、本稿のテーマに直接関係する文献には、*Ridā' al-Dīn Fakhr al-Dīn, Sa'īd, Kazan 1897* があるが、筆者は未見である。

否した場合でもタタール人が若干の土地を所有し続けることは可能になった⁽⁵⁾
[ПСЗ Т.5: 163 (№2920)]。

正教徒農民の居住する土地を、非正教徒のもとから没収し、非正教徒による正教徒への宗教的な悪影響を減ずる政策は、17世紀半ばから存在しており[濱本 2005]、ピョートル1世による上記の1713年と1715年の法令は、旧来の政策を踏襲したものだった。ピョートル1世はこの上に、タタール人上層階級に対して新たな弾圧を加えた。軍務タタール *служилые татары* と呼ばれたタタール人上層階級は、ピョートル1世の治世以降、町や要塞の建設、軍艦の建造のための労働を義務づけられたのである。

すでに1703年から、タタール人はペテルブルクの建設作業に動員されていたが[Теляшов 2003: 54]、1715年5月2日、カザン県の非改宗の軍務タタールに対して、4戸に1人をペテルブルクの建設作業のために提供するように命令が下された。最初の一群は1,255人であり、3ヵ月後に第二陣としてカザン県から1,247人、ニジェゴロド県から120人、アゾフ県から269人がペテルブルクに送られた⁽⁶⁾ [ДПСПС Т.5: 776 (№930); Ислаев 2001: 34]。

1718年1月31日には、カザン、ニジェゴロド、ヴォロネジの各県およびシムビルスク郡の軍務タタールとモルドヴァ人、チュヴァシ人は、海軍工廠の管轄下におかれ、彼らに軍艦建造のための森林伐採・運搬作業が割り当てられた[ПСЗ Т.5: 533–534 (№3149)]。1719年から1723年までは2万人以上、1724年か

(5) 1726年9月30日の法令では、この時点で別の所有者に渡っていない軍務タタールからの没収地は、もとの所有者が正教に改宗していれば、その者に返還され、没収した土地がすでに入手に渡っている場合には、所有者のいない土地から相当分の土地が元の所有者に与えられる、と定められている [ПСЗ Т.7: 699 (№4962)]。1729年3月10日には非改宗の軍務タタールにも没収された土地を返還する法令が出されたが、これはアンナ帝の即位(1730)の直後に撤回された [ПСЗ Т.8: 254 (№5511); Ногманов 2002: 72]。1682–83年にも見られたこのような軍務タタールの封地に関する法令の極端な変化は、これらの時期に起こった政変のために、政権側が軍務タタールの支持を期待して彼らの歓心を買う法令を出した後、政権が安定すると、その法令を撤回したために起こったと考えられる。

(6) ウファ郡では、軍務タタールとメシエリヤキ人はこの労働を拒否した。彼らは役人に戸数を数えさせず、ペテルブルクでの労働の代わりに現金を支払った。しかし、これに対する処罰は行われなかった [Ислаев 2001: 34]。

ら1727年までは毎年1万人前後の非ロシア人が森林伐採作業に動員されている [Ногманов 2002: 154]。1729年には、動員する人数を増やすために、15—60歳と定められていた年齢制限も撤廃された [ПСЗ Т.8: 131 (№5379)]。

1718—1837年の間にヴォルガ中流域で伐採された木材により作られた船は400隻近くにのぼる [Ногманов 2002: 161–162]。森林伐採作業は重労働であり、軍務タタールはこの労働の免除を求めて多くの嘆願書を政府に提出している。1748年以降は、ロシア正教への改宗がこの作業から合法的に逃れる唯一の方法となり、森林伐採労働も領地没収と同様、非正教徒に対する宗教的な抑圧となった [ПСЗ Т.12: 942 (№9556); Ногманов 2002: 143–145]。

封地の没収、森林伐採作業に加え、最終的に軍務タタールを農民階層と同等にしたのは、彼らの税制・徴兵制上の扱いである。1722年7月31日には、森林伐採作業にあたっている軍務タタールが人頭税徴収のための名簿に登録された [ПСЗ Т.6: 754 (№4065)]。1724年5月22日の法令においては、カザン・ニジェゴロド副県知事クドリャフツォフ Н.А. Кудрявцов 管轄下の軍務タタール49,029人から、国有地農民と同額の120コペイカの徴収が命じられている [ПСЗ Т.7: 287 (№4512)]。さらに1725年には、カザン、アストラハン、ニジェゴロド、アゾフの各県の軍務タタールから人頭税の徴収が行われた [ПСЗ Т.13: 447 (№9861)]。1737年からは、森林伐採運搬労働のために徴兵を免除されていた非正教徒も一般農民と同様に徴兵されるようになった [ПСЗ Т.10: 279 (№7378)]。こうして軍務タタールは、その称号と、若干の土地の所有権こそ残されたものの、法的には農民階層とほぼ同等の地位に下げられたのである。

18世紀前半におけるこれらの政策の結果、軍務タタールの数は大幅に減少した。1719年に海軍工廠に登録されたミールザー（タタール人貴族）と軍務タタールの数は23,750人だったが [Алишев 1984: 65]、1795年には、カザン県の軍務タタールは、128人の公の称号を有するミールザーを含め、1,712人とどまった [Хайрутдинов 1997: 87]。上層階級としての軍務タタール人層は、事実上消滅したといってよいだろう。彼らの多くは国有地農民になったが、商人やウラマーとなった者も少なくなかった。

1. 2 18世紀前半の正教化政策

18世紀以前にも、軍人ではない一般の非正教徒に対する正教の宣教は行われていたが、その成果は宣教に赴く人物の情熱によるところが大きく、組織的なものではなかった。1721年に宗務院が教会を管轄するようになる頃から、大規模で組織化された宣教活動が始まる。

最も効果が高い正教化政策の1つとして、新受洗者 *новокрещен* に対する徴兵の免除が挙げられる。1720年にアストラハン県知事に対して、新受洗者は兵士にしないように指示が出されており [ПСЗ Т.6: 266 (№3622)]、また1722年11月31日には、カザン県で新受洗者は徴兵しないことが命令されている [ПСЗ Т.6: 792 (№4123)]。ピョートル1世が始めた恒常的な徴兵制度によって作られた軍隊は、相次ぐ戦争の中で、夥しい犠牲を出した。死刑を覚悟で軍隊から脱走したロシア人と比べれば、非正教徒には合法的に徴兵を免れる手段が与えられたという意味で、この法令は非正教徒に対する優遇と見ることもできる。しかし、1740年には、徴兵を免れた新受洗者の数だけ、受洗を拒む非正教徒が余分に兵士を供出することが定められており [ПСЗ Т.11: 254 (№8236 пун.14)]、受洗を拒む非正教徒は、この法令によってロシア人より重い徴兵の義務を果たさねばならなくなった。

1746年のカザン郡アルスク区のヴォチャク人の事例は、徴兵された非正教徒が受洗して兵役を逃れた顕著な例である。彼らはこの年に76人の兵士を出しているが、徴兵された者はすべて受洗して兵役を免れた。彼らの代わりに徴兵された56人も同様に全員が受洗して兵役から解放された。さらに彼らの代わりとして26人が選ばれて送り出されたが、彼らもすべて受洗した。その結果、アルスク区のヴォチャク人のもとは兵役に適する人間がいなくなり、部外者を雇わねばならなくなった [Ислаев 1999: 34]。

徴兵免除以外では、受洗の報償として免税の特権が与えられた。1680年代にも出された、受洗の報償として税を免除する法令は、1720年以降、繰り返し出されるようになる⁽⁷⁾。

(7) 1720年9月1日 [ПСЗ Т.6: 234–235 (№3637)]、1721年8月23日、1722年7月17

これらの受洗に対する報償は、規定どおり新受洗者に与えられるとは限らず、地方行政の裁量によって、報償が削られることもあった。徴兵に関しては、1722年にカザン地方長官が新受洗者をも徴兵したと中央に報告したことに対し、政府は、まだカザン駐屯軍にいる新受洗者は故郷に帰すようカザン地方長官に命じているが、すでに軍参議会やほかの隊に送られた者には、軍務を続けさせるよう命令している [ПСЗ Т.6: 792 (№.4123); История Татарии: 326]。また、カザン府主教チホン Тихон は宗務院への書簡の中で、スヴィヤシスクの官憲が、1721年に受洗した428人のチェレミス人に、命令を無視して褒賞も与えなければ、免税の権利も認めていない、と訴えている [Описание документов Синода Т.1: 364–365 (№331)]。

1731年には、非正教徒を受洗させるための特別な組織が設立された。この組織は、宗務院ではなく、元老院と政府が直接に管轄する組織だった。1734年から新受洗者事務所と呼ばれたこの組織は、スヴィヤシスクに設置され、多額の資金がつぎ込まれた⁽⁸⁾ [Ислаев 2001: 61]。

1740年から、ロシア政府の正教化政策の新しい段階が始まる。1740年9月11日に、宣教活動を一層強化する法令が出された。この法令では、上述のように、受洗者に徴兵を免除し、その分を非正教徒に割り当てることのほか、全ての新受洗者に対して、0.5—1.5ルーブリの褒賞金と、3年間の免税が約束され、免除された分の税金は、非正教徒から徴収する税金に上乗せされた [ПСЗ Т.11: 248–256 (№8236)]。

1740年代に正教化政策が強まる契機として、18世紀の正教化政策の研究者イ斯拉エフ Ф.Г. Ислаев は、バシキリアを中心とする蜂起や、1737—1739年の露土戦争をきっかけとした反ムスリム感情の高まりを指摘している [Ислаев 2001: 72]。しかし、以下に述べるように、バシキリアに対しては沿ヴォルガ地方と比較すれば、より緩やかな正教化政策がとられており、正教化政策が強ま

日、1731年4月3日、1740年9月11日と、20年間に5回、新受洗者に3年の免税を約束する法令が出されている [ПСЗ Т.11: 253 (№8236 пун.13)]。

(8) 先行研究においては、この組織の名称の変更が1740年と記されることが多いが、ここでは Ислаев 2001: 61 に従い、1734年説を採用する。

る原因としてバシキリアにおける蜂起を挙げるのは矛盾している。ポーランド継承戦争（1733—1735）や、露土戦争、バシキリアにおける蜂起鎮圧のために、キリスト教化の圧力を強めることができなかったロシア政府が、1740年になって内外の問題が収まったために、宗教問題に取り組み始めた、と記すノグマノフ А. Ногманов の見解 [Ногманов 2002: 105] のほうが説得力がある。

次に、ロシア政府はモスクの破壊に着手した。1742年、新受洗者事務所長官セチェノフ Д. Сеченов から、村落部のウラマーがチュヴアシ人にイスラームを受容させ、モスクを建てており、それが正教宣教活動の障害となっているという報告を受け取った宗務院は、同年5月10日にモスクの破壊を決定した [Ислаев 2001: 81–82]。これをうけて元老院は同年11月19日に、

カザン県に存在する、禁令⁽⁹⁾の後に新たに建てられたすべてのモスクは、至聖の宗務院の決定と、カザン県庁に送られた命令により、殊に正教を受容した住民がいるところでは、取り壊し、今後（モスクを⁽¹⁰⁾）建てることは、絶対に許さない。

という命令を出している [ПСЗ Т.11: 719–720 (№8664)]。この法令の発令後、カザン郡で536のうち418、シベリア県のトボリスクとタラ郡で133のうち98、アストラハン県で、40のうち29のモスクが破壊された [ПСЗ Т.12: 157–158 (№8978); Т.14: 609 (№10597)]。

同じ1742年の4月6日には、軍務についている非正教徒に洗礼を施すように正教の従軍司祭に命令が出されている [ПСЗ Т.11: 592 (№8540)]。また、1743年9月28日には、これまで新受洗者を非正教徒の宗教的な影響から守るために、新受洗者に対してもとの居住地からの転居を命じていたのを、逆に、非正教徒が転居することに変更した [ПСЗ Т.11: 914–919 (№8792 пун.3)]。また、1740年代には、メッカに巡礼に行くことも禁じられている [Frank 1998: 33]。

しかし、政府による全面的な正教化政策にもかかわらず、非正教徒の間でイスラーム化が進行していたのは注目に値する。1727年11月30日には、元老院が

(9) 1593年にフョードル帝からカザン地方長官に出されたモスク建設禁止の命令を指す [濱本 2005: 83]。

(10) 引用文中の丸カッコは筆者による補足を示す。以下同様。

カザン県知事に対して、

今後、タタール人のアビズ⁽¹¹⁾は、イスラームの信仰を説くために、また割礼のために、ヴォチャク人、チュバシ人、モルドヴァ人や、その他すべてのムスリムの住居やユルトを絶対に訪れてはならない。もし、そのようなアビズが見つかったときには、1649年法典の記述どおりに罰する（すなわち火刑に処する）。[РГАДА Ф.248. Оп.14. Д.803. Л.446]

と、ムスリム聖職者の活動を制限する命令を下している。1742年11月19日には、政府は、ムスリムとなった者を探し出して、受洗させること、洗礼を受け入れない場合は罰金を課すことを命じている [ПСЗ Т.11: 719-720 (№8664)]。それでも1743年には33人のチュヴァシ人男性と、タタール人に嫁いだ26人のチュヴァシ人女性がイスラームを受容したことが明らかになり、彼らをイスラームから正教に強制的に改宗させること、26人の女性はタタール人のもとからもとのチュヴァシ人の住居にもどすことが命じられている。さらに、これらのチュヴァシ人をムスリムにしたことを認めた16人のタタール人が捕らえられ、シベリアへの無期限の流刑に処された [ПСРВПИ. Т.3: 200-202 (№1115)]。また、アストラハン県知事だったタチシチェフ В.Н. Татищев⁽¹²⁾によると、1744年にカルムイクの221人の男性と、413人の女性がイスラームを受容した。これは、ウラマーによる熱心なイスラーム宣教活動によるものでもあり、また、カルムイク女性がムスリムと結婚するときに、イスラームを受容したためであった。これ以降、タタール人男性とカルムイク人女性の結婚は禁じられた [Ислаев 2001: 94]。

一方、正教宣教師による非正教徒住民の強制的な洗礼は、住民からの反発を引き起こしたため、16世紀半ばに国家政策として正教化政策が始まって以来の伝統を引き継ぎ、18世紀にも強制的な洗礼は公的には禁じられていた。実際、

(11) ロシア語史料では абыз と記される。17—18世紀におけるウラマーと知識人の称号。おそらくはコーランの暗誦者ハーフィズの歪曲形。リザー・ファフレッディンによれば、カザン・ハン国消滅後は、読み書きができなくても、多少のコーランの知識があれば、この称号で呼ばれることもあった [Ислам в Среднем Поволжье 2001: 105]。

(12) タチシチェフについては、阿部 1996 を参照。

1719年7月31日に元老院からシベリア県知事に、ウファとクングル県の非正教徒に対する強制的な洗礼を禁じる命令が出されている [ПСЗ Т.5: 726–727 (№3410)]。1740年9月11日の法令でも [ПСЗ Т.13: 249 (№8236, пун.3)]、また、1750年10月15日の宗務院の決議でも「聖なる洗礼を受けることを望まない者には、絶対に洗礼を強要してはならない。そして、洗礼させるために彼らをなによっても脅迫してはならない」 [ПСПрВПИ Т.3: 284 (№1174)] と、強制的な洗礼は繰り返し禁止されている。

しかし、度重なるこれらの法令にもかかわらず、正教の宣教師による強制的な洗礼が止むことはなかった。政府が強制的な洗礼の事実を知りながら、なんら対策をとらないことも多く、強制的な洗礼の事実を訴えるためにペテルブルクに行ったタタール人が、宗務院に送られて強制的に正教に改宗させられたことさえあった [Ислаев 2001: 103, 114]。

これらの政策により、とくに1740年代には多くの新受洗者が誕生した。政府が正教化政策として新たな方策を打ち出した翌年の1741年には、前年の30倍にあたる9,159人の新受洗者が数えられる [Ислаев 2001: 85]。しかし、新受洗者の多くはタタール人やバシキール人以外のアニミストであり、ムスリムから新受洗者となった者は少なかった。タタール人の新受洗者の人数は、研究者によりいろいろな計算がなされているが、例えば最新のイスラエフの研究によれば、1743年から1749年までの新受洗者278,283人中4,067人とされている¹³⁾ [Ислаев 2001: 99]。

改宗を拒んだタタール人は、新受洗者が免れた税金や徴兵を、自分の割り当てに加えて負担せねばならなかった。これらの負担を嫌ったタタール人の多くは、より宗教的な締め付けが緩く、また、税の負担が軽かったウファと沿ウラル地方に移住して負担を逃れた。以下に示すように、沿ヴォルガ地方と異なり、これらの地域では、同時期に異なった政策が採られていたのである。

13) Д.М. Исхаков の計算によれば、タタール人の新受洗者の数は、1719年には17,000人（タタール人の6.5%）、1744年には23,000人（7%）、1762年には30,300人（7.6%）である [Исхаков 1980: 37]。

2 東方政策におけるタタール人

2. 1 沿ヴォルガ地方のタタール人による東方への移住

イヴァン 4 世による1552年のカザン征服後、沿ヴォルガ地方に多くのロシア人が移住してきた。1710年の人口調査では、沿ヴォルガ地方にロシア人農民81,263戸と、非ロシア人やサク民88,061戸が確認でき、ほぼ同数である。1747年には、カザン県の全住民のうち、非ロシア人は、30%を下回っていた [Рахматуллин 1988: 83]。

これらのロシア人に押し出される形で、17世紀末以降、沿ヴォルガ地方からバシキリア方面へ、タタール人、チュヴァシ人、チェレミス人等の非ロシア人住民が移住していった。17世紀末に、ウファ郡のある住民は、彼らのヤサク地にさまざまな町や地方から、タタール人やチュヴァシ人、チェレミス人や新受洗者が勝手に移住してきて、20以上の村を大君の命令なく形成した、と嘆願書の中に記している [Рахматуллин 1988: 83-84]。18世紀初頭までに、沿ウラル地方には、22,000人以上のタタール人（地域全体の8.7%）が居住していた [Исхаков 1980: 32]。

18世紀にはいると、非ロシア人の沿ヴォルガ地方からの流出はさらに強まる。18世紀の最初の15年間にこの地方で2倍から3倍に跳ね上がった諸税の負担がその主要な原因として挙げられる [豊川 2006: 447-448]。1710年から1714年の間だけで、35,000戸のヤサク農民がカザン県から流出し、その大部分がバシキリアに向かった [Рахматуллин 1988: 84]。この動きは農民だけにとどまらず、1715年にはカザン県知事が元老院への報告のなかで、

カザン県の町々から多くの異教徒の軍人が逃亡し、ウファ郡に流入している。ウファのバシキール人や上述のメシェリャキ人、タタール人は、その逃亡者を引き受け、（当局に）引き渡さない。[ДПСРС Т.5: 776 (№930)] と述べている。

それでも、1719年までは、ロシア国内のタタール人のうち91.3%がヴォルガ中流域に居住していた。1719年から1745年には、タタール人の沿ウラル地方へ

県別人口推移

	1719年	1744年	1762年
ヴォロネジ県	24,787	22,524	23,695
ニジェゴロド県	13,020	17,168	20,182
カザン県	203,232	213,520	248,861
オレンブルク県	19,978	73,849	87,884
(ウファ郡)	〈17,260〉	〈59,238〉	〈71,004〉
(スタヴロポリ郡)	〈838〉	〈3,054〉	〈3,559〉
(オレンブルク郡)	〈—〉	〈8,776〉	〈11,614〉
(イセツク郡)	〈1,880〉	〈2,781〉	〈1,702〉

Исхаков 1980: 33 表2より作成（オレンブルク県が形成されたのは1744年であるため、オレンブルク県については郡の詳細を記した）

の移住によって、その地のタタール人人口は64,000人（全体の20％）に達した [Исхаков 1980: 32]。カザン県知事ヴォルィンスキー А.П. Вольтинский による1730年の報告には以下のように記されている。

20年前は（バシキリアに）35,000かせいぜい40,000人のバシキール人しかいなかったのに、今は逃亡者によって（人口が）10万以上になった。カザンやシベリア、テムニコフ、その他周辺の県のヤサク・タタール人は半分以上がバシキリアに移住した。そのうえ、異教徒、モルドヴァ人、チュヴァシ人、チェレミス人、ヴォチャク人は村ごと移ってきた。[История Татарии: 399]

この時期が、タタール人による沿ウラル地方移住のピークだったが [Исхаков 1980: 33]、1745年以降も、沿ヴォルガ地方からのタタール人流出は続いた。第二回人口調査が1744—47年に行われたが、そののち16年間で、カザン県のタタール人人口は、75,000から45,000に減少した [Рахматуллин 1988: 84] という数字からは、18世紀半ばにおける、沿ヴォルガ地方からのタタール人の大規模な流出が確認できる。

18世紀前半における沿ヴォルガ地方からバシキリアへの移住の波は、1735—44年のオレンブルク建設によってさらに強まった。ロシア政府は、オレ

ンブルクの周辺の町々に移住者を募り、戦略的に重要な地区を定めて、時には強制移住という手段を交えつつ、農民を移住させていった [Рахматуллин 1988: 57-58, 104-105]。オレンブルクは、16世紀に建設されたウファに代わって、ロシアの南東政策の新たな拠点として発展していった⁽¹⁴⁾。

ロシア政府の積極的な移住奨励政策の結果、南ウラル地域（オレンブルク県）の人口は、1719年から1795年の間に3.4倍に増えた [豊川 2006: 260]。バシキリアへの自由農民の移住者には、税の免除など、政府からの経済的な褒章が与えられることが多かったが [Рахматуллин 1988: 105]、タタール人のバシキリアへの移住には、経済的な理由だけでなく、宗教的な弾圧の激しい沿ヴォルガ地方からの離脱という面もあったと考えられる [Исхаков 1980: 33-34]。

18世紀中葉、オレンブルク県の住民構成の第一位がロシア人であることからわかるように [豊川 2006: 261]、これらの移民全体のなかでは、タタール人の占める割合はさほど大きいものではなかったが、タタール人の大量の移住、とくに、ウラマーたちの移住は、バシキール人社会に大きな宗教的影響を及ぼした⁽¹⁵⁾。

沿ヴォルガ地方のウラマー⁽¹⁶⁾は、カザン・ハン国滅亡後、国家の後ろ盾を失

(14) オレンブルクの建設、および、バシキリアへの植民過程については、豊川 2006: 183-284 を参照。

(15) タタール人ウラマーによるバシキリアへの移住とバシキール人の間でのイスラーム宣教が、18世紀のバシキール蜂起の決定的な要因となったと考える研究者もいるが、バシキール人の蜂起の原因は、イスラームの宣教だけではなく、ロシア政府による植民政策への反発など、さまざまな要因がからみあったものだった [Azamatov 1996: 94-95; 豊川 2006: 312-313]。

(16) 沿ヴォルガ地方のウラマーのなかには、タタール人上層階級出身者も少なくなかった。タタール人の系譜においては、18—19世紀のウラマーの祖先の多くがミールザーや軍務タタールとされている [Алишев 1984: 66]。たとえば、19世紀末から20世紀にかけて活躍した社会評論家ユースフ・アクチュラ一族であるアクチュッリン Акчуллин 家は、カザン・ハン国時代から12世代目まではミールザーと呼ばれているが、18世紀末からは、ムッラーの称号で記録されている [Алишев 1984: 66]。また、メルジャーニーのウラマー列伝のなかでも、祖先がミールザーに遡る人物が見られる（例えば、Mullā ‘Abbās al-Kūshārī [Mercani: 261]）。系譜において偽って祖先の身分を高く記すことはままたり、これらの系譜のすべてを信頼することはできないが、それでも、経済力においても教育レベルにおいても一般のタタール人よりは優位にあったミールザーや軍務タタールの家系から、多くのウラマーが輩出したと考えても誤りはないだろう。

ったが、イスラーム世界から孤立したわけではなかった。沿ヴォルガ地方のウラマーの一部は、1552年のカザン・ハン国滅亡後、ダゲスタンに、その後しばらくしてからは、ブハラに行って教育を受けた⁽¹⁷⁾。ロシアによる征服のために滅びかけたマドラサ教育システムを再建したのは、これらダゲスタン出身者や、そこで学んだウラマーたちだった [Ислам в Среднем Поволжье: 109]。

タタール人ウラマーのバシキリアへの移住については、バシキール人から1722年に出された、逃亡中の4人のタタール人の「ムッラーとアブイズ」を、自分たちのモスクや子弟の教育のために自分たちのもとに住ませる許可を願う嘆願書⁽¹⁸⁾ [МИБА Т.1 Ч.1: 296 (№131)]、1734年にスヴィヤシスクとカザンから来た3人のアホン⁽¹⁹⁾の任命をオレンブルク長官キリーロフ И.К. Кириллов に求めるバシキール人からの嘆願書 [Frank 1998: 27]、1735年にキリーロフからアンナ帝へ提出された、カザン出身のタタール人のアホン10人がシャリーアを広め、チュヴァシ人、モルドヴァ人ばかりかロシア人まで割礼し、許可なしにモスクや学校を作っている、という報告書などから確認できる [Azamatov 1996: 95]。

バシキリアにおいては8世紀ごろからイスラームが浸透し始めたと考えられているが、その後もアニミズムの影響が強く残っており、上層階級だけでなく、一般のバシキール人にもイスラームが浸透したのは、沿ヴォルガ地方からの移住者が急増した18世紀以降といわれている。1720年代にロシア政府はバシキリアにおけるシャリーアの影響を制限しようとしたが、タタール人のバシキリアへの移住によって、バシキリアにおけるシャリーアの影響は強化された [Azamatov 1996: 94]。

のちにバシキリアで重要な教育拠点となるマドラサが、1709年にはスユン

(17) 沿ヴォルガ地方とブハラとの宗教的なつながりについては小松 1983; 2006 参照。

(18) この嘆願は受理され、バシキール人のもとに5人（3人のムッラーと1人のアブイズ、1人のメシェリヤキ人）が残ることを、即座にはかの逃亡者を引き渡すことを条件に許されている [МИБА Т.1. Ч.1: 296 (№131)]。

(19) アホン ākhund は、広義にはイスラーム法学・神学に通じた人を指すベルシャ語。ムッラー、ウラマーとほぼ同義。ヴォルガ・ウラル地方とシベリアではイスラーム法の専門家の称号として使われていた。

ドゥク Суюндук 村で、1720年にはステルリバシュ Стерлибаш 村で建設された事実は⁽²⁰⁾ [Фархшатов 1994: 16]、バシキリアにおける18世紀はじめのイスラームの広まりを示すものといえるだろう。激しい宗教弾圧が行われた沿ヴォルガ地域では、モスクやマクタブがロシアの迫害が及ばない地方の村々においてかろうじて存続し、タタール・ムスリムの文化的伝統は都市部よりも村落地域においてより強く維持されたことが知られているが [小松 1983: 485]、彼らの伝統はまた、移住先のバシキリアにおいても存続したのである。とはいえ、バシキリアのイスラーム教育機関のウラマーたちは、18世紀前半にはバシキール反乱の指導者となることも多く、その場合には、反乱鎮圧後に教育機関は破壊され、関係したウラマーたちは厳しく罰せられた [Фархшатов 1994: 16] ということは確認しておかねばならない。

一方、バシキリアにおける正教宣教政策は、バシキリアがロシアの領域になった16世紀後半以降、17世紀半ばまでは限られたものだった。1670年代以降、ロシア政府によって、バシキリアに対する正教化政策が採られるが、1681—1683年、1704—1711年のバシキール人の蜂起の理由のひとつにこれらの正教化政策があったことから、1720年以降、ロシア政府はバシキリアに対する宗教政策を慎重に進めるようになった [Azamatov 1996: 93-94]。

しかし、バシキリアにおける正教化政策の相対的な緩和は、ウラマーの自由な活動を意味するものではなかった。1730年代半ば、すなわちオレンブルクの建設以降、政府によるウラマーに対する統制の動きが見られるようになる [Frank 1998: 26]。オレンブルク遠征隊長官キリーロフは1735年に、

たとえ小さな罪であっても、ムスリム聖職者が関与したら、彼らを容赦せずに罰し、ウファだけではなく、彼らが住んでいる、カザンやその他すべての郡から追放するべきである。というのは、一般のタタール人は、彼らを預言者のごとくに信じており、また、彼らは（一般のタタール人を）慎み深い生活により自分に惹きつけて、（一般のタタール人の）信仰を確

(20) ステルリバシュに1720年に建てられたマドラサの第1 ムダッリスは、ムスリム宗務局の最初のムフティとなった Muḥammad Jān b. al-Ḥusayn の父、Ḥusayn b. Mullā 'Abd al-Raḥmān だった [Frank 1998: 26]。

固たるものとし、高めているからである。[МИБА Т.3: 494 (№549)]

と述べ、ウラマーの追放を主張し、さらに彼らをペルシア語やアラビア語の通訳として利用することを提案している。

1736年、ロシア政府は、キリーロフの提案に従って、そのときバシキール人の間に10人いたアホン⁽²⁾の数を4人に減らし、行政区画である道 *дорога* ごとに一人とすること、アホンは、その道のムスリム共同体が選出するが、最終的にはウファの行政府の承認を受けるべきこと、承認されたアホンは、政府に忠誠を誓わねばならないこと、モスクや学校は、公的な承認ののちに建設することを命じている [ПСЗ. Т.9: 743 (№6890, пун.14); История Татарии: 408]。この決定は、ウラマーの数を定めて認可制とし、ウラマーに忠誠を誓わせる点で、のちに制度化されるムスリム宗務局の萌芽といえる。

1735—40年のバシキール人蜂起の頂点で下されたこの決定は [Azamatov 1996: 96]、アホンの数を減らし、ウラマーを統制する意図で発せられたものだった。しかし、沿ヴォルガ地方では、同時期にこのようなウラマーの承認はまったく行われていなかったばかりか、上に記したように、1734年にはスヴィヤシスクに新受洗者事務所が設置され、強硬な宣教政策が進められていたことを想起すれば、ウラマーの存在を正式に認めたという点で、この決定にはロシア政府のバシキール人に対する譲歩が含まれていたとも考えられる。

実際、1742年に沿ヴォルガ地方やシベリアでモスク破壊が始まったときにも、バシキリアではこれらの地方と同様の政策は採られなかった。ロシア政府は1743年に、ウファ郡の17人の長老 *старшина* から出された、ウファ郡のモスクの破壊中止を訴える嘆願 [Ф. 248 Оп.14 Д.803 Л.1] に対して、1744年2月に、

知られているように、バシキール人の居住している場所には、新受洗者の住居はない。そして、彼らは特別な法のもとにある。このため、現在ウファ地方のバシキール人の居住地にあるタタールのモスクは、今後の命令があるまで残す。

という命令を出し、新たなモスクの建設を禁じるにとどまったのである [ПСЗ

(2) 前述のようにこの10人のアホンはすべてカザン出身のタタール人だった。

T.12: 26 (№8875)]。

近年のロシア帝国論では、ロシア帝国に一貫した民族政策はなく、民族ごと、あるいは地域ごとに政策が異なっていたという議論がなされている⁽²²⁾。18世紀前半の対ムスリム宗教政策に関しても、バシキリアと沿ヴォルガ地方ではこのようにはっきりした違いが見られる⁽²³⁾。この違いの理由は、フランクが指摘しているように、バシキリアにおける行政府が、ロシア化を目指すよりは、利益を上げる植民地的な経営を目指したことに求められるだろう [Frank 1998: 25]。同時代における異なる地域での民族政策の差異は、ここで示したように、民族の移住に結びつくこともあった。

同じ辺境でも、シベリアではモスクの破壊を含む、より強い正教化政策が採られたのに対し⁽²⁴⁾、バシキリアで緩やかな政策が採られた理由の一つは、オレンブルクを基点として中央アジアとの貿易を発展させようとするロシア政府の意図だった。

2. 2 オレンブルクにおける対中央アジア貿易の開始

1730年代後半は、ロシア帝国が本格的に東方に目を向けた時代であり、この時代を境に、ロシアと東方周縁諸民族の政治的、経済的な関係の中心は、アストラハンからオレンブルクに移った [Ногманов 2002: 92]。

1735年から1744年に建設されたオレンブルクは、それを提案したキリーロフの「草案」のなかに明記されているように、ロシアの南東地方の天然資源の利

⁽²²⁾ Беннигсен 1995, Дякин 1995, Мауцзато 2004, 宇山 2006 など。

⁽²³⁾ しかし、バシキール人に対して正教化政策が行われなかったわけではなく、バシキール人が正教に改宗した事例も見られる。1739—1744年の飢饉時にはバシキール人の自発的な改宗が増加した。また、改宗政策の中心拠点だったノガイバクではバシキール人が改宗させられている。さらに、蜂起が鎮圧されたのちには、大量のバシキール人の改宗が起こっている [Azamatov 1996: 97-98]。1738年には、一旦洗礼を受けた後にまたムスリムにもどったバシキール人が、オレンブルク長官タチシチェフによって火刑に処せられた [豊川 2006: 310]。ここで述べているバシキリアにおける宗教的な寛容は、あくまでも、同時期の沿ヴォルガ地方と比較してのものである。

⁽²⁴⁾ シベリアでは中央アジア貿易に大きな役割を担っていたブハラ商人を含むムスリムの移住とモスクの破壊の指示が出され、1745年に実行された [Frank 1998: 29]。

用と経済開発、カザフ人やカラカルパク人などに対する民族政策の拠点の設立という目的とともに、カザフ草原を含めた対中央アジア貿易の活性化という意図をもって行われた〔豊川 2006: 186-198〕。ロシア政府はオレンブルクに、カザフ人との交易の中心になること、ロシア中心部やヴォルガ流域、シベリアからロシア商人をひきつけること、また、タシュケント、ブハラ、東トルキスタンからの商人を集めること、さらには、中国やインドとの交易の開始をも期待した〔Аполлова 1960: 233〕。

オレンブルクを商業都市にするために、ロシア政府はさまざまな特権をオレンブルクへの移住者に与えた。オレンブルクで商売を行う者には関税や人頭税が減免され、国庫からの無利子での融資が行われた。「ヨーロッパの外国人とアジアの諸民族」に対しては、オレンブルクの町もとの居住地との自由な往来と信仰の自由、聖職者を有する権利が認められた〔ПСЗ Т.9: 344-349 (№6584); Аполлова 1960: 100, 234; Михалева 1982: 15, 39〕。

1742年にネプリューエフがオレンブルク委員会を率いると、オレンブルクの商業は順調に発展していく。1747年にオレンブルクの町には837戸が確認されているが、1760年までには、2,866戸に増加した〔Михалева 1982: 22〕。また、オレンブルクで関税を支払って取引された額は、1738年の28,009ルーブリから、1749年の90万ルーブリ、1751年の170万ルーブリへと急増した〔Витевский Т.3: 841; Михалева 1982: 28〕。

ネプリューエフは、

私はカザフ、ヒヴァ、タシュケント、カシュガル、トルクメン、ブハラの
人々を商売に招き、その利益を保証する書簡を外国に送った。〔Неплюев: 138〕
と自伝のなかで述べているように、中央アジアの商人をオレンブルクに招致した。彼はまた、毎年インドに隊商を送ること、ヒヴァとブハラに常駐の事務官を置くことを元老院に提言している〔Витевский Т.3: 827〕。

オレンブルク建設までは、対中央アジア貿易の拠点はアストラハンだった〔Усманов 1992: 506; Ногманов 2002: 92〕。シベリアのトボリスク⁽²⁵⁾を通る草原

(25) トボリスクには、多くの特権を与えられたブハラ商人が居住しており、彼らが18世紀前半までの中央アジア貿易のかかなりの部分を担っていた〔Юлдашев 1964: 81〕。

ルートも利用されていたが、このルートは遠く、遊牧民の略奪に遭う可能性が高かった [Аполлова 1960: 285]。オレンブルクの建設と、1735—1745年の間にバシキリアに造られた28の要塞、36の角面堡 редут [Рахматуллин 1988: 55] は、遊牧民の攻撃を完全に防ぐことはできなかったものの、キャラバンの安全性を高めた。また、18世紀に進んだカザフによるロシア帝国への臣従も、ロシア・中央アジア貿易の振興に役立った²⁶⁾。

オレンブルクには、カザフ人やブハラ、タシュケント、カシュガルの商人がやってきた。すでに1735年には、オレンブルク建設の計画を知ったタシュケントの商人がウファにやってきて、キリーロフに毎年彼らがオレンブルクにやってくることを、ロシア商人をタシュケントに招くことを提案している [Витевский Т.3: 673]。また、例えば1756年7月には、オレンブルクにブハラから60人、タシュケントから14人、ヒヴァからは13人の商人がやってきたことが確認できる [Аполлова 1960: 238]。オレンブルクにやってきた中央アジア商人は、タタール人を介してロシア人と取引することが多かった²⁷⁾。

おそらくはロシア商人の利益を守るため、1755年12月1日に、中央アジア商人のオレンブルクからロシアの内部の町々への移動は、モスクワとベテルブルクにのみ、金銀と宝石を商うためにだけ、夏のオレンブルクでの市が終わるまでという期間限定で許可されることになった。この規制により、中央アジアの商人は、貴金属と宝石以外の商品をオレンブルクで売買せねばならなくなったため、中央アジア商人の代理人としてロシアの諸都市に赴くタタール商人の重要性は、それまで以上に強まったと考えられる [Михалева 1982: 39]。

一方、オレンブルクを拠点としたロシア側の商人による対中央アジア隊商貿易も始まった。オレンブルク委員長官タチシチュフは、1738年、オレンブルクからタシュケントにむけて最初のキャラバンを出した [Аполлова 1960: 113]。

²⁶⁾ ロシアへのカザフの臣従と、ロシアの対中央アジア貿易は密接な関わりを有している。また、18世紀におけるロシアの東方政策を考える上でカザフは重要な要素のひとつであるが、カザフ臣従に関する問題は本稿における議論の枠を大きく超えてしまうため、本稿ではあえてこれ以上は触れない。

²⁷⁾ ロシアにやってきた中央アジア商人のもとでのタタール人仲介人の役割については Небольсин 1855: 158 を参照。

しかし、このキャラバンはタシュケントから2日行程のところで大ジュズのカザフ人によって略奪され、失敗に終わった。1739年、第三代長官ウルソフ Урусов によって送られた二つのキャラバンも、草原で小ジュズのカザフ人に強奪された [Витевский Т.3: 675-676]。オレンブルク発の隊商貿易の成功は、上述のネプリューエフの時代を待たねばならなかった。

オレンブルクから中央アジアに赴く商人のなかには、多くのタタール商人が含まれていた。彼らは中央アジアの人々と同じくムスリムであり、ロシア商人よりも低い関税での貿易が可能だったためである。中央アジアでの関税は、ムスリムが2.5%、キリスト教徒とイラン人が5%、場合によっては10—20%の関税をかけられた⁽²⁸⁾。このためロシア人は、おもにタタール人を雇って中央アジアで貿易させた。カザフ人がロシア商人の仲介者となることもあった。これらの商売の利益は、ときには60%にも及んだ [Михалева 1982: 36]。

オレンブルク建設の目的のひとつには、遊牧民であるカザフ人との貿易の拡大があった。1747年には、一般のカザフ人に対してオレンブルクにおける売買に際する関税免除の措置がとられている。ロシア人とカザフ人との貿易においても、同じテュルク系の言語を用い、カザフ人との会話に慣れたタタール人は、ロシア商人の代理人として利用された⁽²⁹⁾ [Аполлова 1960: 234, 243]。19世紀になると、タタール人はその手に草原における商業のほぼ全てを握っていると言われるほど、カザフ草原において重要な存在となる [Васильев 1898: 15]。

オレンブルクでは、ムスリムでありかつロシア帝国臣民であるタタール人が、商人としても、またロシア商人と中央アジア商人の代理人としても重要な役割を果たすようになった。なかでもオレンブルクで主要な役割を果たしたのは、カルガルとヴォルガ中流域のタタール人だった [Аполлова 1960: 295]。

(28) シャリーアに従えば、非ムスリムに対する関税は5%だが、ロシア人に対しては、それ以上の関税がかけられることもあった [Небольсин 1855: 33-34, 151-152]。

(29) ロシアとカザフとの関係において、タタール人は、商人として以外に、ロシア政府の官吏としても重要な役割を果たした。例えば、カザフ人をロシアへの臣従に導いた А.И. Тевкелев はタタールの出身だと言われている。また、1746年にアブルハイル・ハンのもとに派遣され、オレンブルクにおけるロシアとカザフとの貿易再開のためにハンの説得にあたった А. Бекметев もタタール人である [Васильев 1898: 3-4; Аполлова 1960: 255]。

3 カルガルのタタール商人

3. 1 カルガルの成立

カルガルの商人の母体となったのはカザン地方のタタール商人である。カザン地方では、17世紀末から18世紀初頭にかけて、とくにピョートル1世の改革以降、多くのマニファクチュアが建設され、工業が飛躍的に発展した。また、商業も発達し、17世紀末にはカザンにロシア商人は676人、タタール商人は595人数えられる [Усманов 1992: 509]。この時代は、タタール人の富裕層形成の第一段階といわれているが、この階層の形成に無視できない役割を果たしたのが軍務タタールである [Хасанов 1977: 19, 24]。

1552年のカザン・ハン国のロシアへの併合ののち、タタール人はカザンの城砦内部から追放されて、城砦近くにタタール人町 Татарская слобода を形成した。軍務タタールの一部はそこに居住した。彼らは、遅くとも1685年には、ほかの地域の軍人とは異なり、封地を与えられずに、商業や手工業で生計を立てていた [ПСЗ Т.2: 701 (№1143); Ногманов 2005: 79]。

オレンブルクができるまで、草原経由の対中央アジア貿易の中継地だったトボリスクやタラの関税の記録からは、17世紀後半に軍務タタールがブハラやカルムイクの商品をもって通関していることが判明し [История Татарии: 237-238]、すでにこの時期に軍務タタールが貿易に携わっていたことがわかる。

軍務タタールがどのような過程を経て森林伐採労働を含む国家勤務から完全に解放され、商人となったのかは明らかではないが³⁰⁾、大商人となったタタール商人の多くの家系が、その祖を軍務タタールやミールザーに帰している。代表的な例としてはカザンの大商人ユヌソフ Юнусов 家、アイトフ Аитов 家、ザマノフ Заманов 家などがある。18世紀後半には、軍務タタールが所有するマニファクチュアは100近くに昇った [Алишев 1984: 67; Девярых 2002: 44-45,

(30) 一つの契機としては、1763年に元老院からカザンの軍務タタールに出された、自由により商業を行なう許可が挙げられる。この後、タタール商人の数が急速に増えている [Хасанов 1977: 53]。

58, 76]。

1744年、オレンブルク県知事ネブリューエフに、オレンブルクへの移住を嘆願した、カザン県のママディシュ **Мамадыш** 郡マメトヴァ・プストシ **Маметова пустошь**（タタール語では **Байлар сабасы**）村のヤサク民、サイド・ハヤーリン **Сейт Хаялин** [**Хасанов** 1977: 41; **Ислаев** 2001: 122] は、カザン地方で形成されつつあったタタール商人階級の一人だった。1744年の時点では、オレンブルクへの移住者に与えられた多くの特権にもかかわらず、オレンブルクには商人が十分に集まっておらず [**ПСЗ Т.12: 40 (№8893)**]、対中央アジア貿易の発展を目指した県知事ネブリューエフにとって、ハヤーリンの申し出は、願ってもないものだっただろう。

ネブリューエフは元老院に彼らの移住の許可を求め、元老院は1744年3月8日付けで、オレンブルクに「富裕で商業を営める」200家族のタタール人をカザンから移住させることを許可した。1745年8月8日にサイド・ハヤーリンに与えられた、移住条件を定めた文書においては、カザンのタタール商人だけでなく、カルガルへのヒヴァ、ブハラ、タシュケントやその他の中央アジア諸都市からの技術者や労働者の移住が奨励されている [**РИО Т.147: 187; Михалева** 1980: 40]。

カルガルへの移住者には、

元老院によってそこ（カルガル）にモスクを建てることが許された。オレンブルクの町に与えられた特権によって、それは許されること、また、それなしにはそのような新しい場所に住民を増やすことは不可能であることを考慮したためである。 [**ПСЗ Т.12: 41 (№8893)**]

として、モスクを建設することが許された⁽³¹⁾ほか、徴兵が免除された。さらに、彼らが移住する土地は、周辺の播種地や草刈場、森とともに、「永遠に、子々

(31) しかし、カルガルへの移住者に対して宗教的な制約が全くなかったわけではない。カルガルのムスリムには、ロシア人や、受洗したチェレミス人、ヴォチャク人などの正教徒を雇用することが禁じられていた。1767年、新法典編纂委員会においてカルガルの住民はこの禁止の撤廃を訴え、もしキリスト教徒を雇用した場合には、キリスト教徒に斎戒を守らせ、近隣の教会に通わせると誓っている [**РИО Т.147: 221-222**]。

孫々に渡って没収されることなく彼らの所有するものとなり」、漁や狩猟のための用益地の利用、工場建設の権利に加え、オレンブルクの住民に認められた全ての特権が認められた [РЮ Т.147: 181]。

サイード・ハヤーリンを筆頭とするカザンのタタール商人たちは、1745年8月8日にオレンブルクから18km離れた、カルガラ川がサクマラ川に合流する地点に移住し、ここは、ロシア語名セイトフスキー・スロボダー⁽³²⁾（「サイードの村」の意）、タタール語名カルガル（村に面したカルガラ川に因んで）と呼ばれるようになった。

「オレンブルクのタタール商人」と呼ばれた [МИБА Т.4 Ч.2: 397 (№471)] カルガルの商人は、身分としては農民だった [Аполлова 1960: 242]。ロシア商人には、第一ギルド⁽³³⁾に属する商人にのみ中央アジア商人との売買が認められていたが [Михалева 1982: 40]、カルガルのタタール商人の中央アジア商人との売買にはこのような制限はなかった。こうした優遇はときにロシア人の反発をよび、1766年には、新法典編纂委員会において、タタール商人がロシア商人の活動を阻害しているとして、農民全般、「とくに異教徒」に商業を禁じることがロシア人代議士から提案され [Ислам в Среднем Поволжье 2001: 95]、この議論の中ではカルガルのタタール人が異民族の商人の例として挙げられている [Ташкин 1921: 81]。

以上のようなタタール商人保護政策によって、この町の人口は急増し、1760年には300戸、1,158人の男性が数えられている [Рычков: 181]。1770—71年には、2,000人以上の男性がカルガルに居住し、カルガルはオレンブルク県のなかで人口の上ではオレンブルクに次いで第二位を占めていた [豊川 2006: 232]。

(32) Сагитова слобода, Сеитова слобода 等と記された。1784年11月7日、セイトフスキー・スロボダは、セイトフスキー・ボサードと改名されて、村 слобода から町 посад に昇格し、そのなかには、市政庁 ратуша が設置された [ПСЗ Т.22: 241 (№16089)]。現在はロシア語では Татарская Каргала と呼ばれている [Гафарова 1997]。

(33) ギルドは資産によって区別され、第一・第二ギルドの構成員は人頭税を免除され、体刑の対象からはずされた。1770—80年代のオレンブルクには第三ギルドまで含めても、非ロシア人は存在しなかった。オレンブルク県全体でも、非ロシア人は、第三ギルドに3人のタタール人がいるのみだった [豊川 2006: 236]。

1792年には、カルガルには686人の農民のほか、町人 **мещанин** が168人、商人が1,820人数えられ [Степанов 1897: 606; Усманов 1992: 512]、1796年には1,000戸、人口は両性合わせて9,468人が記録されている [Михалева 1980: 40]。

カルガルの住民は、与えられた耕地で自分たちの村とオレンブルクで消費する穀物を生産するとともに、バシキリアやロシアの諸都市で恒常的に商売を行い、また、毎年夏にはオレンブルクとトロイツクの交易所でカザフやその他の諸民族との交易に携わった。彼らはカザフのハンやスルタンのもとに書簡とともに派遣されることもあった [РИО Т. 147: 215–216]。さらに彼らは、村の成立当初から、中央アジアとの貿易の仲介役としても、オレンブルク県知事ネプリューエフの期待に応えた。ネプリューエフが商人を招くために中央アジア諸国に送った上述の書簡を届けたのもカルガルの商人たちだった [Неплюев: 138]。

1749年には、サイド・ハヤーリンの息子で後に彼を継いでカルガルの長となるアブドゥッラー・ハヤーリン [МИБА Т.4 Ч.2: 400 (№471)] の規模の小さい隊商が3,000ルーブリの商品とともにヒヴァとブハラに送られ、そこで十分な利益を上げて戻ってきた。さらに、1750年にも隊商が送られたが、このときもアブドゥッラー・ハヤーリンの5,000ルーブリの商品と代理人が送られた。この隊商にはブハラの先のバルフとバダフシャンまで、可能であれば、カーブルまで行くこと、その経路を探ることが指示されていた [Русско-Индийское отношение 280 (№137)]。

さらに、ネプリューエフは、「タタール人、アルメニア人、ギリシャ人、あるいは、身分は低いがその言葉と習慣を知悉したロシア人からなる隊商」をインドに送ることを計画した [Русско-Индийское отношение: 280–281 (№137)]。この隊商を仕立てた6人³⁴⁾のうちの一人が、アブドゥッラー・ハヤーリンであり、彼の隊商は、3,000ルーブリの商品をもって1751年9月11日に、ヒヴァの使節シール・ベク **Шир Бек** を伴ってオレンブルクを出発した。しかし、この隊商はアフガニスタンでの戦乱のために失敗し、一行5人のうち、4人が途上

34) これら6人の商人からなる貿易会社には、1751年3月23日に、バルフ、バダフシャン、カーブルとの貿易で、15年間の独占貿易の権利が認められた [Русско-Индийское отношение 283–284 (№139)]。

で死亡した。唯一帰還したイスマイル・ブン・ベクムハンマドは、インドからメッカに行ったのち、ダマスクスで重病にかかり財産をすべて失う。彼は回復後、巡礼にきたクリム・タタール人の力を借りてイスタンブルへ行き、そこで25年間働いたのちに、1783年オレンブルクにもどってきた⁽³⁵⁾ [Усманов 1967; Усманов 1992: 511]。

イスマイル・ブン・ベクムハンマドの記すところによれば、隊商5人のなかにはムッラーの称号を持つものが二人含まれていた [Усманов 1967: 92]。1757—58年に作成された土地証文においても、カルガルで商売を営むムッラー・フセイン・アブドゥッラフマーンフが登場する [МИБА Т.4 Ч.1: 144-145 (№97), 157-159 (№108), 170-172 (№122); 豊川 2006: 266]。カルガルへの移住者のなかに、商人とウラマーを兼ねる者がいたことは、商業ばかりでなく、以下に述べるようにイスラームの学問の拠点ともなったカルガルの特徴をよく表していると言えるだろう。

この隊商の失敗は、しかし、タタール商人の帝国東方での活動に影響を与えることはなかった。彼らが先駆者となって切り開いたタタール商人による中央アジア貿易は、18世紀末には、カザフ草原や中央アジアの諸都市に拠点を築くまでに発展し [Усманов 1992: 512], 19世紀には、「タタール商人は名の知れた生粋のロシア商人よりもはるかに頻繁にブハラやコーカンドに赴く」ようになるのである [Небольсин 1855: 20]。

このように、カルガルのタタール商人たちは、中央アジアの商人とロシア商人との仲介役として、また、自らも隊商を送り出す大商人として富を蓄えていった。彼らがかなりの財産を築いたことは、彼らの出資によりカルガルに複数の工場が建設されていることから [Михалева 1982: 22] 明らかだが、その

(35) イスマイル・ブン・ベクムハンマドは、帰国後にタタール語で旅行記を記しており、この作品は、15世紀にロシアからインドへの旅を書き残したアフアナシー・ニキーチンの『三海渡航記』（ニキーチンの旅行記に関する解説と邦訳は、中沢 2000-2002 を参照）と並ぶ、ロシアからインドへの貴重な旅行記となっている（この旅行記の解説とロシア語訳は、Усманов 1967 を参照）。イスマイル・ブン・ベクムハンマドによれば、この隊商は、ウルゲンチからブハラへ行ったのち、バスラを経て海路インドを訪れ、その後メッカに向かっている [Усманов 1967: 92-98]。

富の一部は、イスラームの宗教施設のために提供された [Фархшатов 1994: 18-19]。

3. 2 イスラームの学問の中心としてのカルガル

移住の条件として信仰の自由が認められていたカルガルにおいては、村の成立と同時に、村の外側にモスクが建設された。このモスクについては、オレンブルク建設当初から長くオレンブルクで勤務したルィチコフが、「石造の土台の上に立てられた、カザン県ではいまや見ることのできない、大きくてすばらしいモスクがある」と記している [Рычков 242; 豊川 2006: 230]。このモスクは、上述のハヤーリン一家の寄進により建設されたようであり、ハヤーリンの一族が20世紀初頭までムタワッリーを務めていた [Денисов 2006: 181]。

1746年には、モスクのそばにこの村で最初のマドラサが建てられた。二番目のマドラサは1760年に、三番目は1773年、四番目は1789年、五番目は1802年と、次々に金曜モスクのそばにマドラサが建てられていき、1869年には、カルガルには9つのモスクとそれに付随するマドラサがあり、そのうち3つのモスクは石造だった³⁶⁾。ここではブハラと同様の方式で教育が行われていた。また、ムスリム宗務局が1789年に設立されるまでは、地域のウラマーを選ぶための試験が行われていた。地域の共同体によってアホンとして選ばれた人物は、カルガルでの試験に合格してはじめて県知事に認可された [Степанов 1897: 608-609; Azamatov 1996: 99; Энциклопедический словарь: 184]。

1章に記したように、1740年代から50年代は、ロシアにおけるイスラーム文化の中心だった沿ヴォルガ地方で激しい宗教弾圧が行われており、大部分のモスクが破壊された。カルガルにおいては、すべてがムスリム住民であり³⁷⁾ [Степанов 1897: 603]、ロシア政府と正教会の最大の関心事であった非ムスリムに対する宗教的な影響を心配する必要がなかったとはいえ、ロシア政府の寛

³⁶⁾ М.Г. Гафароваによれば、18世紀末の時点では、モスクとマドラサはそれぞれ11存在した [Гафарова 1997]。

³⁷⁾ ロシア人は、いたとしても、カルガルの行政を司る書記一人だった [Степанов 1897: 603]。

大さは特筆に値する。

18世紀末には、沿ヴォルガ地方からカルガルに学びに来るイマームやムダッリスも多かった [Энциклопедический словарь: 184]。カルガルの学者としては、アブドゥッラフマーン・ブン・ムハンマド・シャリーフ (1743-1826) ‘Abud al-Raḥmān b. Muḥammad Sharīf (Габделрахман Шарихов) [Mercani: 231], バグダード出身のワリーウッディーン・ブン・ハサン (1747—1831) Walī al-Dīn b. Ḥasan al-Baghdādī [Mercani: 233-234] などがある。なかでも、アブドゥッラフマーン・ブン・ムハンマド・シャリーフは、彼がマドラサで教鞭をとっていた時代には、カルガルは宗教と学問の中心として、ブハラにもまったく引けをとらなかった [Фархшатов 1994: 19] と評されるほど、名声を集めた。19世紀初頭にマドラサが80存在したブハラと比較して [小松 1983: 488], 引けをとらないというのは誇張としても、メルジャーニーのウラマー列伝のなかだけでも、アブドゥッラフマーン・ブン・シャリーフに学んだ者の数は11人に上っており [Mercani: 85-86, 128, 183-84, 219, 228, 229, 254, 261, 266, 269, 314], ロシア・ムスリムに対する彼の影響力の大きさが窺える。

また、エカテリーナ2世から第一アホンの称号を与えられ、ムスリム宗務局の最初のムフティーとなったムハンマド・ジャーン・ブン・フサイン Muḥammad Jān b. al-Ḥusayin と、彼の後を継いだムフティー、アブドゥッサラーム・アブダリー ‘Abd al-Salām b. ‘Abd al-Raḥīm al-‘Abdarī (Габдессалам ал-Габдери) はカルガルで学んでいる [Mercani: 287-289, 298]。

ブガチョフ叛乱時にカルガルが叛徒たちの拠点のひとつとなり [Михалева 1980: 25; 豊川 2006: 340], 叛徒たちの「ペテルブルク」と呼ばれたのは、叛徒のなかに多くのムスリムが含まれており、彼らにとってカルガルが非常に重要な場所として敬われていたことと無関係ではないであろう⁽³⁸⁾ [Степанов 1897: 402]。

1767年にカルガルの住民が新法典編纂委員会に提出した、「我々の村とその

(38) ブガチョフ反乱の指導者には、カルガルのタタール人 Садык Сеитов が含まれていた [Попов 1973: 17]。

周辺に居酒屋を永遠に造らないことについて」の要求は、この地の住民の敬虔さの一端を示しているといえるだろう。ただし、その理由は、「ワイン、ビール、蜂蜜酒が我々住民の誰かに必要となった場合は、これまでどおり」10露里以上はなれた近所の村に買いに行けばよいから、というものであり、カルガルのムスリム全員が飲酒しないわけではなかった [РИО Т.147: 224]。

エカテリーナ2世が宗教的寛容政策を採り始めると、各地にモスクやマドラサが次々と建設され³⁹⁾、カルガルは際立った存在ではなくなる。オレンブルクのタタール人について研究したコサチ Г.Г. Косач は、19世紀初頭にオレンブルクの町に最初のモスクができて以来、オレンブルク自体が、カルガルの代わりを果たすようになり、カルガルは衰退したと記しているが [Косач 1998: 39]、イスラーム教育の面では、カルガルは19世紀に入っても衰退してはいない。

1869年にはカルガルの9つのマドラサでは496人のバシキール人、タタール人、カザフ人が学んでいた。19世紀末には、学生数は700人近くにはのぼった。また、18世紀末からは、マクタブも次々と建てられていき、1816年までに6、1910年までに10のマクタブが開設された [Денисов 2006: 173]。1904年にカルガルを訪れたロシア政府高官ブディオヴィチ А.С. Будилович は、カルガルのマドラサを、ロシアにおけるタタールの学問の中心のひとつと呼んでおり [Фархшатов 1994: 60–61]、カザンやステルリバシュなどと並んで、カルガルは、19世紀後半から20世紀初頭にかけても、重要なイスラーム教育拠点でありつづけた。確かに、カルガルにおいては、旧守派の反対によりロシア語教育が導入されず [Денисов 2006: 179–180]、時代に取り残された面はあるものの、1901年にカルガル出身の大商人フサイノフ兄弟が開設した師範学校⁴⁰⁾は、ロシアにおけるジャディード運動の拡大に重要な役割を果たした [Денисов 2006: 176]。

39) モスクの建設自体は、エカテリーナ2世即位以前の1756年8月23日に、男性200人以上に一つという条件つきで許可されている [ПСЗ Т.14: 607–612 (№10587)]。

40) この師範学校については Ayyub b. Ibrahim 1913 参照。

お わ り に

沿ヴォルガ地方における激しい正教化政策と平行した、バシキリアにおける相対的に寛容な宗教政策によって、また、政府によるバシキリアへの積極的な移住奨励政策によって、沿ヴォルガ地方のタタール人の東方への移住が起こり、これはバシキリアにおけるイスラームの影響の深化という、ロシア政府にとっては皮肉な結果をもたらすことになった。タタール商人の町カルガルの成立はこの移住の波の一環として考えることができる。

カルガルのタタール商人たちには、ロシア政府によるオレンブルクを中心とした東方政策の一部として、例外的に信仰の自由が認められていた。彼らは、オレンブルク行政府に協力しつつ、対中央アジア貿易の発展に努めるとともに、カルガルをイスラームの学問の中心として確立していった。

ロシアにおけるタタール人の位置づけという観点から見れば、18世紀前半の正教化政策と東方政策の交錯を背景に、ロシアにおけるタタール人の役割は、軍人から、オレンブルクを中心とするロシアの対中央アジア貿易の仲介者に変化していったといえる。

エカテリーナ2世時代のタタール人復興の基礎は、じつは正教化政策が推し進められた18世紀半ばのロシア政府のもとですでに築かれつつあった。この矛盾は、ロシア政府がオレンブルクを中心とする東方貿易の発展を目指したことから発生しており、ロシア政府にとっての東方政策の重要性を示すものである。エカテリーナ2世の時代に宗教的な抑圧が弱まると、タタール商人はロシア政府との協力関係をさらに強めて、ロシアにおけるイスラームの発展に一層寄与することになる。

参 考 文 献

一次史料

РГАДА: Российский государственный архив древних актов Ф.248. Сенат и его учреждения. Оп.14. Д.803 (未公刊).

ДПСФС: Доклады и приговоры, состоявшиеся в Правительствующем сенате в

- царствование Петра Великого, изданные Имп. Академией наук. Под ред. Н.В. Калачева (Т.1–2), Н.Ф. Дубровина (Т.3–6). Санкт-Петербург. 1880–1901. Т.5 (1897).
- История Татарии: История Татарии в документах и материалах. Москва. 1937.
- МИБА: Материалы по истории Башкирской АССР. Москва-Ленинград. Ч.1 (1936), Т.3 (1949), Т.4 Ч.1–2 (1956).
- Неплюев: *Неплюев И.И.* Записки Ивана Ивановича Неплюева. Санкт-Петербург. 1893 (2-е изд. 1974).
- Описание документов Синода: Описание документов и дел, хранящихся в архиве Святейшего правительствующего Синода. Т.1 (1542–1721). Санкт-Петербург. 1868.
- ПСЗ: Полное собрание законов Российской империи, 1-е изд. Санкт-Петербург. Т.2, 5–14, 22.
- ПСПРВПИ: Полное собрание постановлений и распоряжений по ведомству православного исповедания Российской империи. Т.3 (1746–1752 гг.). Санкт-Петербург. 1912.
- РИО Т.147: Сборник императорского русского исторического общества. Т.147. Материалы Екатерининской законодательной комиссии. Ч. XIV. Петроград. 1915.
- Русско-Индийское отношение: Русско-Индийское отношение в XVIII в. Москва. 1965.
- Рычков: *Рычков П.И.* Топография Оренбургской губернии. Оренбург. 1767 (Уфа 1999).
- Mercani: Şehabeddin Mercani, *Müstefed'ül-Ahbar fi Ahval-i Kazan ve Bulgar* II, Kazan. 1900 (Ankara 1997).
- Мәржани: *Мәржани, Шиһабетдин, Мөстәфадел-эхбар фи эхвали Казан вә Болгар*, Казан. 1889.

二次文献

- Алишев С.Х. (1984) Социальная эволюция служилых татар во второй половине XVI–XVII вв. // Исследования по истории крестьянства Татарии дооктябрьского периода. Казань.
- Аполлова Н.Г. (1960) Экономические и политические связи Казахстана с Россией в XVIII–начале XIX в. Москва.
- Беннигсен А. (1995) Мусульмане в СССР // Панорама Форум 1995 (3).
- Васильев А.В. (1898) Материалы к характеристике взаимных отношений татар и киргизов с предварительным кратким очерком этих отношений.

Оренбург.

- Витевский В.Н.* (1889–1897) Неплюев и Оренбургский край в прежнем его составе до 1758 г. Историческая монография. Вып. 1–4.
- Гафарова М.Г.* (1997) Из история села Татарская Каргала // Научно-практическая конференция «Татары в Оренбургском крае» Авторский проект. Оренбург.
- Девярых Л.И.* (2002) Из истории казанского купечества. Казань.
- Денисов Д.* (2006) Приходские мектебе Сеитовского посада (Каргалы) // Татарские мусульманские приходы в Российской империи. Материалы Всероссийской научно-практической конференции г. Казань, 27–28 сентября 2005 г. Казань.
- Дякин В.С.* (1995) Национальный вопрос во внутренней политике царизма (XIX в.) // Вопросы истории 1995 (9).
- Ислаев Ф.Г.* (1999) Православные миссионеры в Поволжье. Казань.
- Ислаев Ф.Г.* (2001) Ислам и православие в Поволжье XVIII столетия: От конфронтации к терпимости. Казань.
- Ислам в Среднем Поволжье (2001) Ислам в Среднем Поволжье: История и современность. Очерки. Казань.
- Исхаков Д.М.* (1980) Расселение и численность татар в Поволжско-Приуральской историко-этнографической области в XVIII–XIX вв. // Советская этнография 1980 (4).
- Косач Г.Г.* (1998) Город на стыке двух континентов: Оренбургское татарское меньшинство и государство. Москва.
- Мацузато К.* (2004) Генерал-губернаторства в Российской империи: от этнического к пространственному подходу // Новая имперская история постсоветского пространства. Казань.
- Михалева Г.А.* (1980) Сеитовский посад Оренбурга и его роль в развитии русско-среднеазиатской торговли (вторая половина XVIII–начало XIX века) // Общественные науки в Узбекистане 1980 (12).
- Михалева Г.А.* (1982) Торговые и посольские связи России со среднеазиатскими ханствами через Оренбург. Ташкент.
- Небольсин П.И.* (1855) Очерки торговли России с странами Средней Азии, Хивой, Бухарой и Коканом. Санкт-Петербург.
- Ногманов А.* (2002) Татары Среднего Поволжья и Приуралья в Российском законодательстве второй половины XVI–XVIII вв. Казань.
- Ногманов А.* (2005) Самодержавие и татары. Очерки истории законодательной политики второй половины XVI–XVIII вв. Казань.

- Попов С.А. (1973) Оренбургская губерния накануне крестьянской войны 1773–1775 гг. (Численность, национальный и социальный состав населения, социально-экономическое положение) // Научная конференция, посвященная 200-летию Крестьянской войны 1773–1775 гг. в России под предводительством Е.И. Пугачева. Тезисы докладов. Оренбург.
- Рахматуллин У.Х. (1988) Население Башкирии в XVII–XVIII вв. Москва.
- Степанов К. (1897) Каргала, или Сеитовский посад // Русский архив 1897(8).
- Ташкин С.Ф. (1921) Иногородцы Поволжско-Приуральского края и Сибири по материалам Екатерининской законодательной комиссии. Вып. 1-й. Иногородцы Поволжско-Приуральского края. Оренбург.
- Теляшов Р. (2003) Татарская община Санкт-Петербурга: к 300-летию города. Санкт-Петербург.
- Усманов М.А. (1967) Записки Исмаила Бекмухаммедова о его путешествии в Индию // Ближний и Средний Восток: История, экономика. Москва.
- Усманов М.А. (1992) Татарское купечество в торговле России с восточными странами через Астрахань и Оренбург в XVII–XVIII столетиях // Russian History 19 Nos. 1–4.
- Фархиаатов М.Н. (1994) Народное образование в Башкирии в пореформенный период 60–90-е годы XIX в. Москва.
- Хайрутдинов Р. (1997) Татарская феодальная знать и российское дворянство: проблемы интеграции на рубеже XVIII–XIX вв. // Ислам в татарском мире: История и современность. Казань.
- Хасанов Х. (1977) Формирование татарской буржуазной нации. Казань.
- Юлдашев М.Ю. (1964) К истории торговых и посольских связей Средней Азии с Россией в XVI–XVII вв. Ташкент.
- Энциклопедический словарь (2006) Ислам на территории бывшей Российской империи. Энциклопедический словарь. Т.1. Москва.
- 阿部重雄 (1996) 『タチーシチェフ研究——18世紀ロシア一官僚＝知識人の生涯と業績』 刀水書房
- Ayyub b. Ibrahim (1913) Kargalıda 9 nchï mahallaning mädräsäsi. Mögallimlar ichün jaygi sinfları. Kargalıda kızlar mäktäbi. In: Burhan Shäräf (ed.) *Gani Bay*. Orenburg.
- Azamатов, D. D. (1996) Russian Administration and Islam in Bashkiria. In: M. Kemper, A. von Kügelgen, D. Yermakov (eds.) *Muslim Culture in Russia and Central Asia from the 18th to the Early 20th Centuries* (Islamkundliche Untersuchungen Band 200). Berlin.
- Frank, A. J. (1998) *Islamic Historiography and 'Bulghar' Identity among the Tatars and*

Bashkirs of Russia. Leiden, Boston, Köln.

- 『中央ユーラシアを知る事典』（2005）小松久男・梅村担・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社
- 濱本真実（2005）「17世紀ロシアにおける非ロシア正教徒エリート政策」『スラヴ研究』52
- 小松久男（1983）「プハラとカザン」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社
- Komatsu, H. (2006) Bukhara and Kazan. *Journal of Turkic Civilization Studies* No. 2.
- 中沢敦夫（2000-2002）『「アフナーシー・ニキーチン」の三海渡航記』——翻訳と注釈』（1）（2）（3）『人文科学研究』（新潟大学人文学部）103（2000），105（2001），108（2002）号
- Paksoy, H. B. (1992) Z. V. Togan: The Origins of the Kazaks and the Özbeks. *Central Asian Survey* Vol. 11, No. 3.
- 豊川浩一（2006）『ロシア帝国民族統合史の研究：植民政策とバシキール人』北海道大学出版会
- 宇山智彦（2006）『「個別主義の帝国」ロシアの中央アジア政策——正教化と兵役の問題を中心に——』『スラヴ研究』53

* 本稿はイスラーム地域研究の研究グループ「中央ユーラシアのイスラームと政治」, 及び平成18年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

**THE FOUNDATION OF THE TATAR TRADING TOWN
OF QARGHĀLĪ (SEITOVSKAIA SLOBODA)
—EARLY 18th CENTURY RUSSIAN RELIGIOUS POLICY
AND EASTWARD EXPANSION—**

HAMAMOTO Mami

Russian Christianization policy during the first half of the 18th century was first focused on the Tatar upper classes who, as military officers, formed a portion of the Russia's upper class until the 17th century. Those who refused conversion to the Russian Orthodox Church, that is, those who rejected Russianization, were still referred to as military men (служилый) in the 18th century, but they were stripped of various privileges, and in reality their social status was reduced to that of farmers. The Tatar upper class ultimately disintegrated during this period. From members of the former Tatar upper class who had remained Muslims came many merchants and Islamic clerics—probably due to their level of education, a certain level of savings, and the commercial experience they had garnered since the 17th century.

From the 1730s to 1750s, the Russian government promoted an organized policy of Christianization without regard to class. Some Muslims escaped religious oppression by migrating to the east. In Bashkiriia, situated to the south-east of the Volga region, religious oppression was not carried out as stringently as in the Volga region due to the rebellions of the Bashkir people as well as the policies of colonization and commercial development being promoted at the time. As a result of the eastward migration of the Tatars, the Islamic influence that had already existed in Bashkiriia became even stronger. It can be surmised that establishment of the Tatar merchant town of Qarghālī was a part of this wave of migration.

For the Russian government, the existence of Muslim Tatar merchants was necessary for the conduct of the eastern trade, and therefore Qarghālī, a Kazan Tartar merchant village, which was granted many privileges, including freedom of belief, was established on the outskirts of Orenburg. Qarghālī became a crucial base for the commercial development of Orenburg, as the government had intended, but at the same time it also developed as a center of Islamic study.

When viewed from the standpoint of an attempt to grasp the position of the Tatars in Russia against the backdrop of the policies of the imposition of Orthodox

Christianity and eastward expansion in the early 18th century, the role of the Russian Tatars can be seen as having evolved from that of warriors to that of serving as intermediaries in the trade between Russia and Central Asia, which was centered on Orenburg.

The foundation for the revival of the Tatars during the reign of Ekaterina II was already being established during the mid 18th century through the Russian government's policy of imposing Orthodox Christianity. This contradiction, growing out of the fact that the Russian government sought to develop the eastern trade centered at Orenburg, also indicates the importance of the Russian government policy of eastward expansion.